

サンデー毎日

2011 8.21-28号

説教強盗的節電の強要 漂う大政翼賛的雰囲気

震災から5カ月後の今も福島県南相馬市の仮設住宅に整体師の方々と出掛けているものの、私自身の日々の生活で「変化」を感じるとすれば、節電で少し蒸し暑いと感じる点でしょうか。



新党日本代表
田中康夫 (55)

電気事業連合会編纂の『電気事業便覧』最新版で



福島県相馬市で開催された相馬野馬追。被災者の意識は変わった？

いる日本は、被災地以外の景気も治安も説教強盗的な「節電」の強要で「デフレスパイラル」に陥つていくのではと案じています。

阪神・淡路大震災の時は公共広告機構のCMも、瀬戸内寂聴さんや森毅さんが肩の力を抜いて語り掛けていました。「心を一つに、頑張ろうニッポン」と唱和する今回は、理念なき大連立を永田町で予行演習しているみたいな大政翼賛的空氣が漂って、困った感じですよ。

「復興増税」が当然の如く報じられる風潮も、おかしな話です。単年度の「消費」に向ける特例公債（赤字国債）と違って今回の復興費用は、社会的共通資本を再建する為です。建設国債と同じ性格なのです。

社会資本の耐用年数は一般的に60年。だから、建設国債も60年償還。なのに、巨額の復興費用を5年や10年の短期間に増税で賄うなんて、それこそ持続的財政運営ならぬ破滅的國家運

営で論理矛盾しています。百年に一度、千年に一度の大災害と政府も認めているのですから少なくとも「百年国債」で償還すべき。

10兆円を5年の短期償還だと1年2兆円に上る負担も、100年分割なら1年1000億円。増税ありきの硬直した「古い方程式」から、「新しい方程式」へ

と発想を大転換せねば、明るい希望の未来はニッポンに到来しません。

「デフレだからこそ増税が相応しい」と、震災前から真顔で語っていた与謝野馨さんが財政運営を牛耳っている政治の舞台に、洞察力と構築力、決断力と行動力を持ったリーダーが登場しないと不味いですね。